

居眠り運転防ぐ座布団

ネット接続 姿勢分析し警告

九州工業大学（北九州市）と中津自動車学校（中津市）が10月下旬から、モノをインターネットでつなぐ「IoT」などの技術を活用し、高齢ドライバーらの事故を減らす実証実験に共同で取り組む。運転席に設置した座布団型センサーなどのデータをネット経由で分析し、ドライバーの姿勢を把握して居眠りを警告する仕組みで、来春の実用化をめざす。集めたデータは、教習所での運転指導にも役立てたい考えだ。

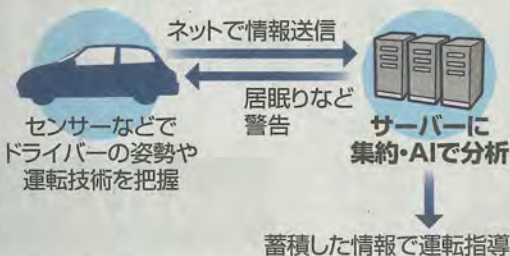
（中西瑛）

九工大 中津自動車学校と実験



座布団型のセンサーを開発したのは、九工大でデジタル信号処理を研究する佐藤寧教授（58）。圧力を検知する装置を座布団に内蔵

実証実験のイメージ



し、重心のかかり方でドライバーの姿勢を把握する。実験では、頭の動きや車の加速度が分かるセンサー、位置情報を確認する全地球測位システム（GPS）も組み合わせる精度を高める。例えば、頭や体が前後・左右に揺れた場合、カーブなどの運転状況も加味した上で、居眠りや疲労によるものかを判断し、警告音などで知らせる。ネット経由でドライバーに集約したデータをAI（人工知能）も使って分析。「体の動きで多くの情報が得られる。イライラしているなどの感情も分かる」と佐藤教授は語る。さらに、蓄積したデータから、交差点での左右確認やブレーキのかけ方といった運転技術も評価できるといふ。

今回の実験は、IoTの普及に力を入れている九州経済産業局が仲介し、中津自動車学校と共同で実施することになった。同局によると、大学と自動車学校が連携し、交通事故防止のシステムづくりに取り組む事例は珍しいという。

中津自動車学校では、高齢者講習を受ける70歳以上のドライバーが年間約2000人おり、このうち数十人〜100人程度に協力してもらい、自家用車にセンサーなどを搭載。来年2月頃まで実験を続ける。

赤い羽根共同募金運動が1日、県内でも始まった。大分市中心部のトキハ本店

赤い羽根募金 園児ら呼びかけ

園児や県共同募金会の三河明史・国東市長30人が参加。「赤い羽金に協力をお願いしまなど声を合わせて呼けると、買い物客らが浄財を投じていた。三河市長は「募金の中で苦しい立場に私たちの助けになる。多人々に協力をお願い」と話していた。



前では、同市横田の子ども園の園児らが募金をした。運動は12月31日行われる。

同会によると、善意災害時のボランティア

座布団型のセンサーを運転席に設置する佐藤教授（左）と相良専務（北九州市若松区で）＝中西瑛撮影

募金活動をする園児ら